

海國兵談 第四卷

戰 畧

戰略とは孫子に言へる所の算を精しくし、其上にて謀慮を廻らし、戦に勝つべき手だてを工夫して軍するを言ふなり、此戰略に疎き時は、拙き軍をする事あり、將たる者能々思慮して工夫を附べし。

戰略又は軍略とも言ふ、然るに世人軍法と、戰略とを取違ひたる人多し、夫軍法とは軍中の諸法度にて相定めたる掟の事なり、戰略とは上に言ふ如く戦に勝つべき手だてを工夫して軍するなり、俗人の所謂軍法は戰略なりと知るべし。

戰略に精しかるべき事を欲せば、和漢の軍記を多く見て自然と會釋あるべし、何れにも多く先縱を知て、其上に釋然と不動の動機を修し得たる人にあらざれば、急速臨時の場にて胸中より湧出るものにあらざれども、初學の爲に大概を左に擧ぐるなり、猶工夫あるべし。

孫子に兵は詭道と言ふ事ありて、接戦の妙境とするなり、然るに聖人の兵法を學ぶ

と言ふ人間在て、此詭道と言ふ事を殊の外忌み嫌へとも争ふべからず、僭詭は「いはり」と讀む字にて虚言の事なれども此にて虚言と見ては適當せざるなり、只然らざる事と見れば可なり、其趣意は東を討つ體をして西を討ち、鷹狩する體をして直に軍を仕懸る事など、謂はゞ然らざる事をして勝易きを取る爲の一時の計を指すなり。間を用ふる事、皆一時の權謀にして定法なし、然れども間を用ふるの大略を知らざる時は用ふる難きものなり、孫子に五間を言へり、郷間、内間、反間、死間、生間なり、郷間は其郷民を間に用ふるなり、内間とは敵の身内の者を用ふるなり、反間とは敵より此方へ來りし間を、却て吾間に用ふるなり、死間とは漏すまじき趣の事を洩して、敵方へも風聞させ、味方にて洩したる者を尋ね出して是を殺し、敵に實の様に思はせて、別に謀を廻らすを言ふ、生間とは間を遣して敵の容子を見聞するなり、生て歸る間と言ふ事なり、總て間は謀計の主となるものなれば、戰略第一のものとするべし。夏南を征せず、冬北を伐たずと言ふ事も心得居べし、義貞の北國落なども時節遅なはりし故、寒氣のために相違して敗軍に及べり、日本の中にては焼かる程の南國はなき事なれども、北國へ働く事は時節を考合すべし。逸り雄にして強き敵ならば、味方懦弱の體をなして敵を驕らせて討つ事あるべし。

終日合戦しても、勝負決せずして軍を止め、後日勝負を附くへしと約する時などは、晝の軍に味方の宗徒の者とも多く討れて、味方大いに疲れたり、坏と流言して敵の氣を驕り怠たらせて、急に夜討する事もあるべし。

敵短慮の大將ならば、此方より無禮の振舞を仕懸て怒りを起させ、無益の軍させて疲らし、其弊を討つことあるべし。

悠悠不斷にして懦弱の敵將ならば、短兵急に挫くべし。

怨の事ありて軍を起したる敵などは、念比に申分などして、和睦を取つくり、油断したる所を討事あるべし。

殘暴にして村里を犯し掠むる者は、勢を強大に張懸け威武をなして取り拉ぐべし、諸方具足したる敵ならば、輕々しく軍を仕懸る事なかれ、能く工夫して働くべし。

大敵を見ては侮ると言ふ事、古の勇將に在る事にて、今の了簡にて少しく野猪武者に似たる様なれども、敵の大勢を見て臆する心氣、露許り生しても、其氣持にて取懸ては負る事疑なし、然るに味方殘らず一致して大敵を侮る心に成り突て入る時は、小勢を以て大勢を追崩したる例多し、何れにも力戦は生を忘れて只死々と切入る事、第一の心懸なり、謙信、清正、忠勝等是なり。

小敵を見て侮らざるは良將の慎みなりと知るべし、古も侮り輕んじて、小敵の爲に大軍を破られし例多し、能く考へ見るべし。

敵地へ踏込んで戦ふには、肝要の地を見すまして早く是を取るへし、肝要の地とは取らるる時は敵方にて難儀に及ぶ所を言ふなり、或は米倉又は城廓を見下す高所或は運送の道筋又は大社、大寺等なり。

戦勝ち次第に、地を略して敵國へ踏込む時、我を拒むか或は従はずして戦ふべき氣色ある土邑をは塵にして猛威を示し、敵國を手に入る事もあるべし、又殺伐亂暴を嚴敷禁じて寛仁の徳を示し、或は年貢を薄くする約束等して敵國を親附せしむる事もあるべし、此二つは時勢と敵國の政事、風俗を詳に呑込に非れば辨し難き所なり、其大概を言はば初の手合には塵にして軍威を示し、其後は殺伐を禁して親附せしめ、又時宜を見合せて、折々猛威を示す事、敵地を略する大法なるべし、只肝要は寛猛の徳を相兼ね時宜に隨て施す事と心得べし、片寛片猛は一方ききなる故忌む事なり、降參と稱する者に眞の降參あり、大將を衒ふ爲に降參するあり、他の味方と謀し合せて裏切する爲に降參するあり、此外謀計の降參間々ある事なり、能く察すべし、眞の降を殺すときは見懲して以後降參する者なし、然る時は地を略し難し、又偽の降

を助け置く時は害を受ける事あり、詳にすべし、是を試るには降將の甲冑等に心を附べし、自印に成るべき異形の物を着したるは必ず意味ある降人なり、先縦あり、切て害を除くべし、又偽の降參と見ても速に領承して或は城を受取又は人数を奪ひなごして、其上に彼降人を或は撫育し又は畏服せしむる時は眞の降人に成る事あり、何れも主將の器量にある事なり。

敵國に押込ては、其國中に豪傑用ゐられずして憊して時を待つもあるべし、或は功德ある者推沈められて、上に恨を含む者もあるべし、又才智逞く國中の事を呑込たる者用ゐられずして、引籠り居るも有るべし、此類のものを聞出せば召出して懇ろに持成し、國土の様子、合戦の手だて、方略等尋問して厚く遇すべし、大に強を得るの道なり、扱て又右の如く敵國の人を我手下に用ふる事は、其國の士民を安堵せしむる爲にもなる事なり、兎角敵國へ押入ては土民に恨を生せざる様にする事第一なり、後口に氣遣ありては、思ふ儘に敵城も攻難き事なり、能く考ふへし。

總て戦の妙は奇正を能く呑込にあり、奇正とは仕手脇と成て働く事なり、敵と相手組を正兵とし、横を入るるを奇兵とす、然れど無形に非れば妙とするに足らざるなり、無形とは、正變して奇となり、奇變して正となり、敵をして我奇正を見る事能はざら

しむる事なり、偕かく言へばとて妄に奇兵の働をのみ貴ふ事もなし、元來正兵にて堂々齊々として挫くべき事なれども、或は人數の多寡又は敵方猛將、謀者等にて堂々齊々にのみ擬作難き事もあるなり、是奇を用ふる所なり、既に奇を用ふる上は己れの奇正を敵に見透かされざる事、是無形を尊ふ所なり、神武帝の軍立にも陰軍、陽軍あり、これ全く奇正を用ゐられたるなり、可貴可思。

第四卷終

海國兵談 第五卷

夜軍

夜の戦は陣所へ寄るを夜討と言ひ、城へ寄るを夜込と云ふ、互に陣を取て、夜出て戦ふを夜軍と言ふは世上の言ひ習なり、其中夜討と夜軍とは少し許り異なり、夜討と夜込とは大なる差別なし。

夜は敵の様子も分明ならず、足場の善惡、旌旗の相圖も、慥に見分難く、敵味方も定かに知れ難きものなれば、諸事不都合なる故、十に八九は夜の戦をば好まざるなり、然れども、夜討は勝難き敵に勝つともあるものなり、然しながら約束十分に調はざれば、只彼是とひしめく許にて戦も仕難きものなりと言へり、此故に相圖の鳴物、相印、相詞等を能々呑込ませすべし、先づ夜戦の大趣意は旌旗の相圖は見へ難き故、鳴物の相圖を厳しく定むべし、鳴物の相圖とは東西南北の鳴物を定め教ゆる事なり、例へば拍子木を東の鳴物、太鼓を南、貝を西、喇叭を北と定むるが如し、平生の操練に此趣を能く呑込ませ置て、事に臨み間違のなき様すべし、此外松明火薄等工夫次第定む